**木村　靄村 （きむら・あいそん）**

**１、プロフィール**

歌人。アララギに入会し、島木赤彦、斎藤茂吉に師事、県アララギの中心的歌人として活躍。書・画をたしなみ多彩な文化活動を行ったことでも知られる。

＜生没＞

1899（明治32）年５月１日 ～ 1966（昭和41）年２月25日

＜代表作＞

歌集『山村』（昭和24年）『日蝕』（昭和30年）

遺歌集『木村靄村歌集』（昭和47年）

＜青森との関わり＞

三戸郡階上村（現階上町）に生まれる。後に小中野（現八戸市）に移り住み、書店経営。八戸市文化協会長を務める。県文化賞受賞。

**２、作家解説**

木村靄村（本名忠蔵）は、明治32年５月１日、三戸郡階上村（現階上町）大字鳥屋部字田ノ上八番地に生まれた。明治40年、材木商を開業するため、一家は三戸郡小中野村（現八戸市）に転住するが、靄村は一人階上村に残り叔父の家に寄寓した。大正２年階上尋常高等小学校を卒業すると、同地で放畜と農業に従事することにした。ここでの生活は、後年の靄村の歌の源泉となる。

大正９年21歳の時、靄村は朝日歌壇へ投稿を始めた。そして、「牛を見失ひし嶮し山をあちこちと尋ねて小夜更けにけり」の歌が、選者の島木赤彦によって、「深く自然の呼吸に合したるところあるは、真摯なるひたすら心を以て事象に向ふが故なり」と評され、大いに感激した靄村は、終生短歌に情熱を傾けることになる。

大正10年、赤彦を慕ってアララギに入会した靄村は、本格的に作家活動を始める。

大正15年、島木赤彦が逝去した。その悲しみと、昭和２年、三戸郡小中野町（現八戸市）で書店を開業したことによる多忙とが重なり、一時期作歌を中断した。

昭和８年より作歌を再会、斎藤茂吉に励まされながらアララギに投稿、靄村が経営する木村書店の看板は、戦後茂吉が書き与えたものであったという。昭和11年、青森アララギに加わり、青森アララギの会員とは終生交わることになった。

また､地元八戸にあっては､戦前戦後を通じて暁星短歌会の指導的役割を果たし､戦後は昭和21年に歌誌｢群山｣､同22年には稲垣浩らと｢陸奥短歌協会｣を結成し歌誌｢陸奥｣を､同28年には歌誌｢玄土｣を創刊、昭和33年には八戸市文化協会長に就いた。

昭和37年、多年に渡る作歌活動・文化活動によって第４回県文化賞を受賞したが、この年の秋から高血圧症のため東京で避寒するようになり、昭和41年２月25日東京で亡くなった。奇しくも茂吉の命日であった。昭和47年、故郷階上岳大開平に「乳呑ます牛のまなこにふるさとの山はさかさまに映りてゐけり」の歌碑が建立された。

**３、資料紹介**

〇『日蝕』

図書

1955（昭和30）年６月30日

185mm×130mm

第二歌集｡昭和２年から昭和19年までの歌を収録､ほとんど茂吉の選を経たものである｡同門の佐藤佐太郎が序文で､「木村氏の歌は必ずしも尖鋭ではないが､時に切実である」と記している｡牧歌的抒情を基調とした歌､書店主としての生活詠歌が多く収録される。